

福祉系高校の職業的及び教育的レリバンス

著者	岡 多枝子
雑誌名	東洋大学社会福祉研究
号	6
ページ	22-27
発行年	2013-08-05
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006963/

●学位取得論文要旨

福祉系高校の職業的及び教育的レリバンス

社会学研究科 社会福祉学専攻
岡 多枝子

1. 研究の枠組み

(1) 研究の背景

福祉社会の中核となる福祉専門職の確保が求められる中で、社会保障審議会(2006)において福祉系高校の意義が議論の対象となり、改正「社会福祉士及び介護福祉士法」(2007)の介護福祉士養成ルートのひとつに位置づけられた。先行研究によると、福祉系高校で学ぶ生徒(本稿では以下、福祉系高校生とする)は、実習を通して高齢者イメージが肯定的に変化する(萩原・名川2008)ことや、高校時代の福祉教育が卒業後のライフコースに影響を及ぼしている(田村・保正ら2008)。このように、福祉系高校に関する研究では一定の教育成果が示されている。しかし、これまで福祉教育の当事者である高校生や福祉教育の実践者である教員を対象とした研究、特に生徒の入学動機や学習内容と進路選択については十分に研究されてこなかった。本研究では、職業や教育の研究領域で用いられる「レリバンス(relevance)」(本田2000)即ち、目的と内容・結果の適合性・適切性という理論枠組みを援用する。本田(2006)は、国際平均に比較して日本の教育システムの特徴の1つは、カリキュラムが、生徒にとって「職業生活や社会生活に意義を持つ、いいかえればレリバンス(relevance)のあるものと感じられている度合いが極度に低い」ことだと指摘している。従来、日本の学校教育において、福祉系高校などの職業高校は、学力において進学校より低位の教育として位置づけられてきた。しかし、青年期の就労問題が問い直される今日、福祉教育が果たす意義を検討することは、福祉系高校創設時(1987)に国が企図した専門教育だけでなく、青年期に福祉を

学ぶ意味を検討する上でも重要な研究課題である。

(2) 研究の目的

そこで本研究では、「福祉系高校のマクロ・メゾ・ミクロの各レベルにおけるレリバンスとその構造を明らかにする」ことを目的として、以下に、5つの検証命題を立てる。

- ①マクロレベルにおいて、2つのタイプ(福祉就職と福祉進学)は成果をあげているか。
- ②メゾレベルにおいて、資格取得に関する高校タイプ(資格校と教養校)の教育効果の特性は何か。
- ③メゾレベルにおいて、教員の教育活動の成果と課題は何か。
- ④ミクロレベルとして、福祉系高校生の目的(入学動機)と内容(授業や実習)及び結果(進路選択)に有意な関連がみられるか。生徒は福祉を学ぶ経験を意義があるものと考えているか。
- ⑤福祉系高校のレリバンスはどのような要素によって構築されているのか。

(3) 研究の方法

本研究では、先行研究の概観により研究課題の明確化を行い、全国の福祉系高校における生徒の進路実績や資格取得、卒業生の就労状況への検討を通してマクロレベルのレリバンスを明らかにする。次に、福祉系高校生への質問紙調査をもとに、介護福祉士国家試験受験資格の取得の有無に着目してメゾレベルのレリバンスを検討する。続いて教員への面接調査をもとに、生徒の学びや進路選択に対する教員の評価や支援への検討を通してメゾレベルのレリバンスを明らかにする。さらに、前述の生徒への質問紙調査をもとに、高校への入学動機と実習経験、進路選択に着目してミクロレ

ベルのレリバンスを明らかにする。最後に研究の結論を提示する。

2. 章の構成

序 章 福祉系高校を巡る論議

第1章 福祉系高校のレリバンスに関する先行研究

第2章 高等学校福祉教育の変遷とマクロレベルのレリバンス

第3章 教員の語りによるメゾレベルの質的レリバンス

第4章 高校の特性によるメゾレベルの量的レリバンス

第5章 生徒の学びを巡るミクロレベルの量的レリバンス

第6章 生徒の実習と進路を巡るミクロレベルの質的レリバンス

終 章 福祉系高校の職業的及び教育的レリバンス

3. 各章の概要

序章では、研究背景と研究課題の検討を行い、研究の方法を提示した。

第1章では、先行研究の概観と整理を行い、福祉系高校生の学びと発達特性に関して、福祉観の形成と持続および職業的発達との関連に関する福祉系高校の特性を検討した。家庭環境や福祉的体験による福祉への親和性と、職業や教育におけるレリバンス概念を整理し、福祉系高校における実習体験などの福祉の学びが、生徒の卒業後のライフコースに肯定的な影響を及ぼすことを確認した。

第2章では、職業教育及び福祉系高校の歴史的変遷を辿り、福祉系高校に関する国の資料の分析を行った。その結果、①生徒の介護福祉士国家試験合格率が全国平均に比べて高い、②卒業生の約6割が福祉分野を選択している、③卒業3年後の離職率が13.5%と低い、ことが明らかになった。従って福祉系高校は、全国的に見て、生徒の資格取得や福祉系進路、継続就労などに成果がみられることから、マクロレベルにおける福祉教育政策のレリバ

ンスが示された。

第3章では、福祉系高校教員を対象とした面接調査を実施してKJ法（川喜田1967, 1970, 1985）による質的研究を行った。その結果、最終的な島の表札（KJ法による表現）として、教員は「体験が福祉への親和性を育」み、福祉系高校での「実学が職業力を高め人格を陶冶する」と評価し、普通教育にも「福祉教育を広げていこう」と提起している。従って教員の語りから、福祉系高校には本田（2006）が重視する「職業生活や社会生活に意義を持つレリバンス」の存在が示された。しかし、厳しい現場に生徒がゆらぐ場面や、つまずいた生徒の指導に苦慮する現状も明らかになり、福祉教育のすべてにレリバンスがあるとはいえず、「自負・苦悩・普遍性」というアンビバレントな状況を抱えながら、生徒の自立を支える福祉系高校教員の姿が浮上した。

第4章では、福祉系高校のレリバンスを明らかにする目的で、全国の福祉系高校233校に在籍する高校3年生に対する調査を実施して、212校、4,127名から回答を得た。本章では、資格に関する高校タイプ（資格校と教養校）に着目して、メゾレベルにおけるレリバンスの特性を比較・検討し、以下の結果を得た。①入学動機が「福祉の進路」とする生徒は両者で有意差はなかった。資格校では、福祉の資格や周囲の勧めを入学動機とする割合が高く、教養校では、福祉の勉強を動機とする割合が高い。②実習では、資格校は2年実習に比して3年実習の不安感の減少が大きく、感動的体験の増加も大きい傾向が見られた。資格校は実習日数も多く、高度の専門性が求められること、実習前後の福祉の授業が充実していることが影響していると考察する。教養校では、資格校に比べて「福祉は無理」と感じる割合が高かった。③進路では、3年間を通して資格校は福祉就職が最多であり、教養校は福祉進学が最多である。進路選択タイプ（入学時と卒業時）では、資格校が「福祉から福祉」と「一般から福祉」が多く、教養校は「一般から一般」と「福祉から一般」が多い。従って、資格校は専門教育を行う条件を整備し、教養校は、幅広い福祉教育と普通教育を柔軟に組み込むなど、高校の特性に合わせた教育課程の編成が重要である。

第5章では、前章の調査から、ミクロレベルのレリバンスを検討して以下の結果を得た。①入学動機が福祉の「学び、資格、進路」という「福祉目的型」の生徒が81.0%を占めている。②実習では、「福祉の理念を確認した」、「将来の進路選択に役立った」、「感動的な経験をした」などの「福祉志向・能動」因子と、「技術の未熟さを感じた」、「福祉現場の厳しさを知った」、「反省が多かった」、「不安でいっぱいだった」などの「現実直面・反省」因子を抽出した。③進路では、福祉就職は入学時から低下して3年実習から増加に転じて卒業時は34.5%であり、福祉進学は入学時から横ばい傾向で推移して卒業時は31.0%である。一般就職は入学時から増加して卒業時は15.7%であり、一般進学も入学時から増加して卒業時は14.4%である。未定は入学時から低下して卒業時は4.4%である。従って、卒業時に65.5%が福祉系進路を選択している。また、入学から卒業までに進路希望を変更する生徒は6割強おり、2年実習後から3年実習前の期間に最も多く進路を変更しており、実習が進路選択に影響を与えることが確認された。④進路選択への満足度は74.9%が満足と答えており、高校生活への評価は、福祉の勉強ができたことや将来の人生に有用であるとの肯定的な割合が高い。

第6章では、第4章の調査の自由記述(2,446名)をもとに、KJ法を用いた質的研究を行った。その結果、進路選択タイプ(入学時と卒業時)の特性が明らかになった。「福祉から福祉」を選択したのは、福祉の学びによって自己や現場と向き合い、福祉現場で確かな進路を見極めた生徒である。「一般から福祉」を選択したのは、実習でリアルに学び感動して福祉に変えた生徒である。「福祉から一般」を選択したのは、学びを通して厳しい福祉現場や自己の適性と向き合い、葛藤の中で福祉から撤退した生徒である。「一般から一般」を選択したのは、想像以上に厳しい福祉現場で自己とのミスマッチを痛感するとともに福祉の学びを通して得た知識や技術を評価して、他分野に福祉を生かしたいとする生徒である。また、卒業時の進路選択の5タイプの特性も明らかになった。「福祉就職」を選択したのは、福祉現場の困難と理念の両面を体得して、深く関わって福祉就職を決めた生徒で

ある。「福祉進学」を選択したのは、幅広い福祉の専門職やキャリアに視野を広げて福祉進学して専門性を高めたいとする生徒である。「一般就職」を選択したのは、厳しい福祉現場に衝撃を受けて福祉とのミスマッチを感じて一般就職を選んだ生徒である。「一般進学」を選択したのは、福祉を学んで他の専門を志向して一般進学に決めた生徒である。「未定」でいるのは後悔と満足の間で未定のまま逡巡している生徒である。以上の中で、実習と進路選択に強い関連があると考えられる進路選択タイプ(入学と卒業)と卒業時に未定の合計5つのタイプを取り上げて、質的研究から導き出されたKJ法の最終的な島の表札を吟味した。その結果、福祉系高校のミクロレベルのレリバンスは、表1の通り14の下位概念に統合された。そのうち、「福祉職の選択」、「福祉への変更」、「専門性の獲得」、「専門性の上昇志向」、「職務基礎能力」という下位概念は、「職業的レリバンス」として統合され、「人間的成長」、「将来的有用性」、「進路決断」、「学習意欲喚起」、「福祉教育の評価」、「社会への要望」という下位概念は、「教育的レリバンス」として統合された。一方、「現場との乖離」、「福祉は無理」、「学業未達成」という下位概念は、「負のレリバンス」として統合された。

終章では、1章から6章をまとめて、福祉系高校のレリバンスを総合的に考察し、ミクロレベルにおける量的及び質的レリバンスの両者の整合性を、以下の通り明らかにした。

①「福祉から福祉」の量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究では「進路に役立つ」、「福祉で働く」、「感動体験」、「理念を確認」などの能動的な実習が高くなっているが、このことを質的研究からみると「学びを通して進路や夢への思いを強め実現できた」ことや「実習が福祉進路の確かな選択を促す」として表現されている。第2に、量的研究で示された「厳しい現場」への認識や、実習で「反省した」経験が高い割合を示しているが、質的研究では「困難な現場が自己を鍛えた」という表現に集約されている。第3に、量的研究の「勉強ができた」、「全体に良かった」との肯定的評価は、質的研究では「専門教育に誇りと自信」を持っ

たことに示されている。

②「一般から福祉」の量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究で「感動体験」が3年で増加しているが、このことを質的研究からみると「実習で心が揺さぶられ」たとして表現されている。第2に、量的研究で示された「厳しい現場」への認識や実習で「反省した」経験が高い割合を示しているが、質的研究では「苦労の中で普通科にはない特別な学び」や「福祉の現場と意義をリアルに体感」したと表現されている。第3に、量的研究の「勉強ができた」との肯定的評価が高い割合を示すことは、質的研究では「専門性に関心が高まり福祉進学した」ことに示されている。

③「福祉から一般」の量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究では「進路に役立つ」が85%以上の高い評価を行っているが、このことを質的研究からみると「福祉を人生に役立てたい」として表現されている。第2に、量的研究で示された「全体によかった」が福祉系進路に次いで高い割合を示しているが、質的研究では「福祉系高校ならではの様々な学びが誇りだ」という表現に集約されている。第3に、量的研究の「福祉は無理」との否定的評価が高い割合を示すことは、質的研究では「理想と異なる現場にショックを受け」、「自己の適性や限界から無理と見極め」たとして示されている。

④「一般から一般」に関する量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究では「将来に役立つ」という能動的な実習を示す割合が高くなっているが、このことを質的研究からみると「福祉の学びは将来役に立つ」、「福祉の学びで進路を見極めた」として表現されている。第2に、量的研究で示された「全体に良かった」との認識が高い割合を示しているが、質的研究では「福祉系高校の学びは充実していた」という表現に集約されている。

⑤「未定」に関する量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究では「入学を後悔」や「進路に役立たず」などの反省的な実習を示す割合が高いが、このことを質的研究からみると「しっかり取

り組めば良かった」として表現されている。第2に、量的研究で示された「福祉は無理」との認識が高い割合を示しているが、質的研究では「福祉職は無理だと痛感」したという表現に集約されている。第3に、量的研究の「勉強ができた」が8割を超えて肯定的評価が高い割合を示すことは、質的研究では「福祉を学んで成長できて良かった」とすることに示されている。第4に、量的研究の「将来に役立つ」も8割を超えていることは、質的研究からみると「学びを将来に生かしたい」として表現されている。

4. 研究の結論

以上の量的及び質的研究を、研究の最初に立てた検証命題に照らして考察する。

1. マクロレベルにおいては、生徒の6割以上が卒業時に2つのタイプ（福祉就職と福祉進学）を選択しており、福祉系高校の創設時に国が企図した福祉専門職の養成に関する成果が示された。また、この割合は国の調査と一致することでデータの裏づけを得た。
2. メゾレベルのレリバンスは、資格取得に関する高校のタイプによって異なっていた。資格校では資格取得を目指して能動的で反省的な実習を行い、福祉就職する者の割合が高く、教養校では福祉の勉強を入学動機に広く福祉を学び、福祉進学する者の割合が高い結果が示された。従って、高校タイプに合わせた教育課程の編成が重要である。
3. 教員は福祉教育成果の意義を評価して普通教育への拡大が必要だとする反面、生徒の支援に苦慮する現状もみられ、福祉教育を原点から問い直す時期に来ている。
4. ミクロレベルのレリバンスは、生徒の8割以上が福祉に対する明確な入学動機を持ち、実習を含む学びを通して目的を達成し、9割以上が肯定的な評価をしている。
5. ミクロレベルのレリバンスは、「職業的レリバンス」、「教育的レリバンス」、「負のレリバンス」から構築され、入学動機や実習経験、進路選択タイプなどによって複雑で多様な要素が見

出された。

6. 以上のことから、マクロ、メゾ、ミクロの各レベルにおいて多元的なレリバランスが認められるとともに、各レベルにおいて取り組むべき課題も明らかにされた。

5. 研究の意義と課題

本研究では、福祉系高校生と教員に対する全国的調査をもとに、マクロ、メゾ、ミクロのレリバランスを検討して、実習経験と進路選択の関係を明らかにした。特に、生徒や高校のタイプによるレリバランスの多元性と、職業的及び教育的レリバランスを中核とする福祉系高校のレリバランスの構造を明らかにしたことには、研究の意義が認められる。しかし、本研究では高校3年生のみを対象としており、実習前後の進路選択の変化や実習不安に対する詳細な検討は行われていない。今後は高校1年、2年、3年を経年的にパネル調査することでより正確なデータの検討を行いたい。また、入学動機と実習及び進路選択の推移、卒業後のキャリア形成を連関させた継続調査は、学校から職業への接続や高大接続教育などの視点からも重要であり今後の研究課題である。

【要旨に関する文献】

- 萩原明子・名川 勝 (2008)「福祉科高校生の高齢者イメージに与える社会福祉現場の効果」『社会福祉学』49(1), 98-110.
- 本田由紀 (2004)「高校教育・大学教育のレリバランス」『JGSSで見た日本人の意識と行動：日本版 General Social Surveys研究論文集 3 (東京大学社会科学研究所資料第24集)』29-44.
- 川喜田二郎 (1967)『発想法－創造性開発のために』中央公論社.
- 川喜田二郎 (1970)『続・発想法－KJ法の展開と応用』中央公論社.
- 川喜田二郎 (1986)『KJ法－混沌をして語らしめる』中央公論社.
- 岡多枝子 (2007a)「高等学校福祉教育の現状と課題－福祉系高校生への調査－若年労働市場と進

路指導、発表要旨」『日本教育学会大会研究発表要項』6, 144-5.

岡多枝子 (2007b)「福祉系高校における生徒の入学動機と進路決定－動機の差異に応じた支援のあり方」『福祉教育・ボランティア学習研究年報』12, 192-208.

岡多枝子 (2007c)「高等学校福祉教育における生徒の進路選択－進路希望の『変更と維持』－」『東洋大学大学院紀要』44, 145-68.

岡多枝子 (2008)「高校福祉科と介護福祉マンパワー」田村真広・保正友子編著『高校福祉科卒業生のライフコース－持続する福祉マインドとキャリア発達』ミネルヴァ書房, 9-12.

岡多枝子 (2010)「高校時代の進路選択から見た高大接続福祉教育」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』16, 94-103.

表1 福祉系高校のレリバンス（マイクロレベル）

番号	進路選択タイプ（入学時と卒業時）				卒業時	レリバンス	概念
	福祉 / 福祉	一般 / 福祉	福祉 / 一般	一般 / 一般	未定	下位概念	
1	実習が福祉進路の確かな選択を促す	福祉の現場と意義をリアルに体感して見極めた				福祉職の選択	職業的 レリバンス
2	学びを通して進路や夢への思いを強め実現できた	実習で心が揺さぶられ福祉に変えた 実習で良い経験を得て福祉に変えた				福祉への変更	
3	現場に福祉の理念を見出した					専門性の獲得	
4		専門性に関心が高まり福祉進学した				専門性の上昇志向	
5			働く上で基礎となる力を培った			職務基礎能力	
6	困難な現場が自己を鍛えた	福祉の現実と向き合い自己を成長させた	人や社会と大事に事に関わる経験で成長した	苦労が視野を広げ価値観を変えた	福祉を学んで成長できて良かった	人間的成長	教育的 レリバンス
7			福祉を人生に役立てたい	福祉の学びは将来役に立つ	学びを将来に生かしたい	将来的有用性	
8			広く真剣に将来や進路と向き合った	福祉の学びで進路を見極めた		進路決断	
9		入学後福祉に興味・意欲が湧いた				学習意欲喚起	
10	専門教育に誇りと自信がある	苦労の中で普通科にはない特別な学びの高校だった	福祉系高校ならではの学びが誇りだ	福祉系高校の学びは充実していた		福祉教育の評価	
11	社会や高校も改善してほしい					社会への要望	
12			理想と異なる現場にショックを受けた	福祉現場は想像以上に大変だった		現場との乖離	負の レリバンス
13			自己の適性や限界から無理と見極めた	福祉系高校と福祉職はミスマッチだった	福祉職は無理だと痛感した	福祉は無理	
14					しっかり取り組めば良かった	学業未達成	

注 進路選択の各項目の文章は KJ 法によって導き出された全体図解の最終的な表札である